

д→[т] производство production
(дс→тс→ц と発音される)

ж→[ш] тяжко heavily
等である。

発音練習

- ① ветер wind ② воздух air ③ закон law
④ эффект effect ⑤ облако cloud ⑥ уравнение
equation ⑦ сила force ⑧ метеорология metoro-

- logy ⑨ скорость velocity ⑩ изучение study
⑪ тепло heat ⑫ погода weather ⑬ предска-
зание forecast ⑭ теория theory ⑮ движение
motion ⑯ попытка attempt ⑰ пора time,
season ⑱ вращение rotation ⑲ масса mas
⑳ капля drop ㉑ холодный cold ㉒ жёлтый
yellow ㉓ сейчас now ㉔ вода water ㉕ дождь
rain ㉖ снег snow

〔書評〕 新天文学講座の完成 (全15巻)

B5判 恒星社発行 各巻 450円

天文書出版の老舗として知られた恒星社より、1957年5月から刊行され始めた新天文学講座15巻が完成したので紹介しておきたい。近頃は学問の進み方が急速なので一専門分野にのみ通暁することも容易でない。まして他の分野について知ることは大へん困難なことであるが、地球物理学の傍接科学である天文学の現大勢がよみやすいこのような形でわれわれに示されたことは誠によろこばしい。気象関係の官署に天文の問い合わせがあった時に、それは専門がちがうとって答えぬよりは、やはり地学の研究、調査の一つの中心として、本講座に記載されてある位のことは答えるのが学問の普及上のぞましいことではないか。以下各巻の直接気象と関係ありそうだと思う項目について紹介しよう。

I 星座：夜間の気象観測には星座の知識は必要と思うが中野、野尻の星座の説明のほか、簡単な球面天文学(中野三郎)、星座早見の作り方(弓滋)は観測者に便利なものだろう。

II 太陽系：惑星各論(鈴木、田鍋)や最近の火星観測(佐伯恒夫)は天体気象学の新しい結果が提供されているし、流星(小楨孝二郎)、隕石(村山定男)、黄道光と対日照(古畑正秋)は天文というよりは地球の上層大気に足をふみ入れた問題でもある。

III 太陽：野附誠夫編集のこの巻は最新の太陽物理学がよくまとめられている。気象変動の総元じめについて気象関係者もここに記載された程度は身につけておきたい。

IV 地球と月：昼夜と季節(村上忠敬)、緯度変化(服部忠彦)などが気象と関係のあるものだろう。

V 地球の物理：国際地球観測年(長谷川万吉)、大気の運動(正野重方)、海洋の物理(速水・荒木)、太陽

が地球に及ぼす影響(柴田淑次)、地磁気・電離層(米沢利之)、極光と夜光(古畑)、極地の科学(永田武)、人工衛星(宮地政司)など広い意味の Geophysics が要領よくまとめられている。

VI 恒星の世界

VII 原子核物理学と星の内部構造：この巻には宇宙線(早川幸男)、気象現象と天文観測(池田徹郎)の項目がふくまれている。

VIII 銀河系と宇宙

IX 天文学の応用：暦に関連した項目(鈴木、渡辺)の他、人工衛星の軌道論(竹内端夫)、時間の管理と時報(宮地政司)、無線時報とその利用法(飯島重孝)などが気象関係にも役立つものだろう。

X 電波天文学：太陽電波(高倉達雄)、電波による流星の観測(古畑正秋)、ロケットによる上層観測(前田憲一)が新しく開拓された分野として気象学にも関係が深い。

XI 天文台と観測器械：天文時計(虎尾正久)、望遠鏡と天体写真(広瀬秀雄)などが役立つだろう。

XII 天文学の歴史

XIII 天体の位置観測：時刻のきめ方(飯島重孝)、野外天体観測による経緯度および方位角の測定(清水疆)は気象観測の基礎でもあろう。

XIV 天体の軌道計算：この中には流星の軌道決定の項目(広瀬、小楨)をふくむ。

XV 天体の物理観測

以上、気象学と関係のありそうな項目について抜粋し紹介したが、新しい天文学そのものについても問題のとり上げ方、考えの進め方の上でわれわれに示唆を与える点が多い。各巻 430 円、15 巻のみ別冊総索引つき 480 円。近く第2期の会員募集をすることが予告されているが、書店で必要項目のみをそろえることもできる。

(1958 X-17, 根本順吉)